

正
本

2006年(ワ)第6484号

謝罪及び損害賠償請求事件

原告 王 子雄 外39名

被告 日 本 国



意見陳述書

2007年5月14日

東京地方裁判所民事第13部 御中

中華人民共和国江蘇省無錫市崇港小丁巷20号

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告 徐 長福

1 私は、1933年8月7日生まれで、今年74歳になります。

私は、6人兄弟の下から2番目です。父の仕事の関係で、江蘇省無錫市で無錫市で生まれました。

父は、私が生まれた頃、無錫市に住み、仕事は無錫市に隣接する常州市にある電力会社で勤務していました。しかし、1937年7月以降、日本は中国に対する全面的な侵略戦争を開始し、その年中に無錫も常州も日本軍に占領されました。無錫や常州は、日本軍による残虐行為が横行し、非常に危険な状態でした。その上、父の勤めていた会社も閉鎖され、仕事もなくなりました。それで、父は無錫に住むことをあきらめ、南京占領後の中国の臨時首都になった重慶に、会社の何人か同僚と一緒に移り住むことを決めました。

1939年の初め、家族は、重慶を目指して移動しました。私は5歳でしたが、重慶への移動は大変だったという強い印象が残っています。

2 重慶に着いて間もなく、父は、建築の技術をもっていたので「大渡口鋼鉄会社」でボイラーの据え付けと煙突を建築を請け負う仕事を見つけました。

その父の仕事の関係で、家族も大渡口に住むことになりました。父が、長江沿いの埠頭付近の小さい丘の上に、竹を使って質素な新しい家を造りました。

その年には、日本軍が重慶市を激しく爆撃するようになりました。それで父は、爆撃から家族が避難するための防空洞を家の裏山の斜面につくりました。その防空洞は私たちの家族専用のものでした。

その年（1939年）の12月に、妹が生まれました。

3 私は、6歳のとき、日本軍の爆撃によって瀕死の重傷を負いました。

爆撃で負傷した日、私は、家の下にある河原で遊んでいました。その時、日本軍の爆撃機が接近したことを知らせる警報が出ました。しかし、遊びに夢中になっていた私は、警報に気がつくのが遅れてしまいました。私は、爆撃警報が出てからずいぶん遅れて警報に気が付き、びっくりして急いで自分の家に戻りました。しかし、他の家族たちは、すでに防空洞に逃げてしまい、家の中にはもう誰もいませんでした。

私が防空洞に行こうか迷っていると、突然、大きな音がして、同時に大振動を感じました。爆弾が家の間近に落ち、家が半壊してしまったのでした。

私は、崩れてきた家の下敷きになり、そのために大怪我をしました。最も酷い怪我をしたのは右足の大腿部で、その内側の肉がお碗で大きく搔かれたように削ぎ取られてしまいました。その部分は骨が露出してしまいました。そのほか、頭、腕、腰、足の裏などにも重傷を負いました。

私は、爆撃で家が壊れて、その下敷きになった時点で気を失ってしまいました。爆撃の危険が去ってから、父と兄が壊れた家の中から気絶していた私を掘り出してくれました。発見された直後の私は、血まみれで、もう死んでしまっ

たかのようにだったそうです。母は、私を最初に見て、死んだと思ってショックを受け、手に抱えていた妹を思わず落としてしまったそうです。この話は、私が大きくなってから母から何度も聞かされました。

私が爆撃で怪我をした時期は、妹が生まれた後、旧正月までの間のことで、新暦で言うと1940年1月です。

4 家の下から救い出された私は、すぐに大渡口鋼鉄会社の附属病院に運ばれました。しかし、その病院の医者たちは、私の怪我が酷いのを見て、うちの病院にはこの怪我を治療できる設備も技術もないと告げて、最も重傷だった大腿部の怪我には何の治療もしてくれませんでした。それで父と兄は、このままでは死んでしまうと考えて、私を重慶市内の外国人が経営していた大きな病院に運びました。

私は、重慶市内の大きな病院で、肉を剔り取られた大腿部に私自身の皮と肉を移植するという大手術を受けました。幸い、その移植治療が成功し、私は命が助かりました。

しかし、今でも右足の大腿部の内側には、横10センチ、縦18センチの掌ほど大きな傷跡が残っています。また移植のために皮と肉を取った左足の太ももの正面の部分には、横1・5センチ、縦2センチの丸い形をした18ヶ所の傷跡が残っています。

私は、重慶市の大病院に数ヶ月間入院し、退院してからからも家で半年ほど寝て過ごしました。私は、その頃、小学校に入る年齢になっていましたが、爆撃で大怪我をしたために体力が非常に弱くなったので、両親が心配して一年間体力回復のために自宅で静かに休んで過ごしました。その後、私は、大渡口鋼鉄会社の社員の子たちのための小学校に入学しました。

小学校に行くようになってから、私は自分の大腿部の傷跡が気になるようになり苦しみました。両親に、もっと傷跡が目立たないように治療できないかと

求めました。小学校のクラスメートの李君と陳君のお父さんは二人とも大渡口鋼鉄会社の付属病院の医師でしたので、親切に私の傷跡を診てくれました。しかし、その二人の医師は、傷跡をこれ以上きれいにする治療は無理だと私に告げました。私は、一生大きな傷跡が残ることを覚悟しました。しかし、私の気持ちの中では、成人に近づくほど、爆撃の傷跡を気にするようになりました。

一方、私の怪我の治療費は、ぎりぎりの生活をしていた私の家にとって大変な重荷でした。私が病院に入院していた数ヶ月の間の医療費だけでも、その費用は、父が煙突建築の請負の仕事で締結した契約金の大部分に相当したとのことでした。

5 日本軍は、爆撃で、私以外にも、周辺の多くの人を傷つけました。例えば、父の仕事仲間の董さんは、爆撃で左腕を失いましたし、また同じく父の仕事仲間の郭さんは顔に火傷を負った上、両眼も失明してしまいました。

日本軍が1945年8月に中国に降伏したので、その年の10月に私たち家族は南京に移りました。さらに1948年に家族は無錫に戻りました。

私は、1956年に無錫市の第3中学を卒業し、浙江大学に入学して建築を学びました。しかし、体が弱くてどうしても学校を休みがちになり、遂に1959年に進学をあきらめて退学しました。

私は、大学を中退した後、無錫の設備工場に勤めるようになりました。仕事に就いてから間もない1961年に、妻の張海珍と結婚しました。二人の子供に恵まれました。現在、子供は二人とも結婚して無錫に住んでいます。

私は、ずっと無錫で働いてきましたが、1993年に定年退職しました。

6 私は、以上に述べたように、6歳の時に違法な無差別爆撃の被害にあい、生死をさまよう瀕死の重傷を負いました。奇跡的に皮膚移植の手術で生きることができました。しかし、私の右足の大腿部の怪我は、私から健康を奪い、そ

のために私は一生を体力のない体で生きてきました。学業や仕事で、様々な不利益を受けてきました。また私の大腿部の怪我の後はとても醜く、そのために大変苦勞してきました。その怪我のために、夏になっても怪我の跡を見せるのが恥ずかしく、一度も短パンをはいたことはありません。

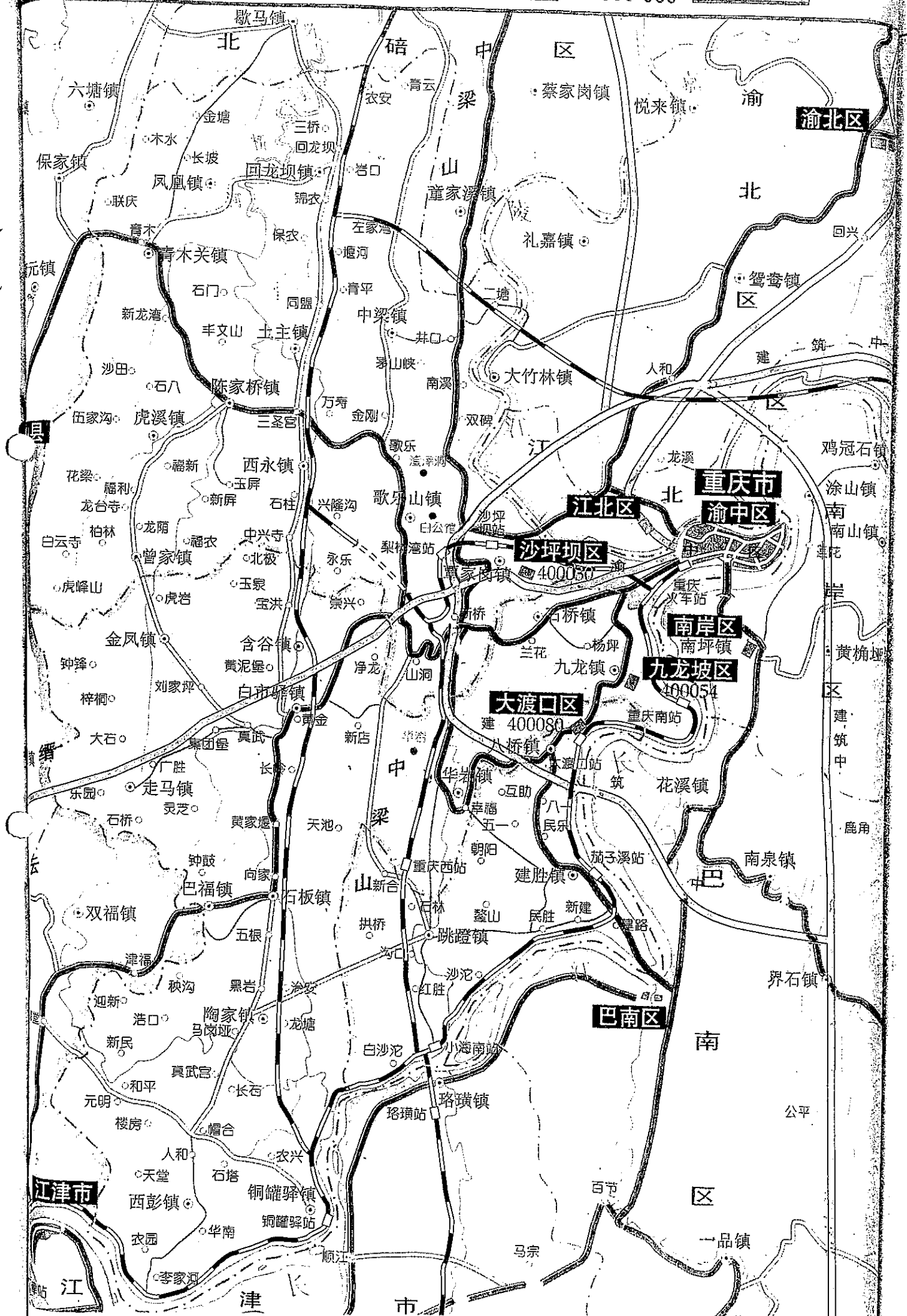
こうして私は、日本軍の爆撃で受けた怪我によって、精神的にたいへんな重圧を受けながら毎日を過ごしてきました。爆撃から67年経ちましたが、私に大怪我を負わせた日本軍の爆撃のことを一日も忘れたことはありません。

日本軍の重慶大爆撃は、たくさんの何の罪もない中国の一般住民を傷つけ、殺してきました。私は、「歴史の生き証人」として、日本軍の重慶大爆撃が違法な無差別爆撃であり、決して許せない戦争犯罪であることを告発します。

日本政府は、重慶大爆撃の違法な戦争犯罪であることを認め、私たち重慶大爆撃の被害者に真摯に謝罪し、適切な補償措置を実行する法的義務があります。

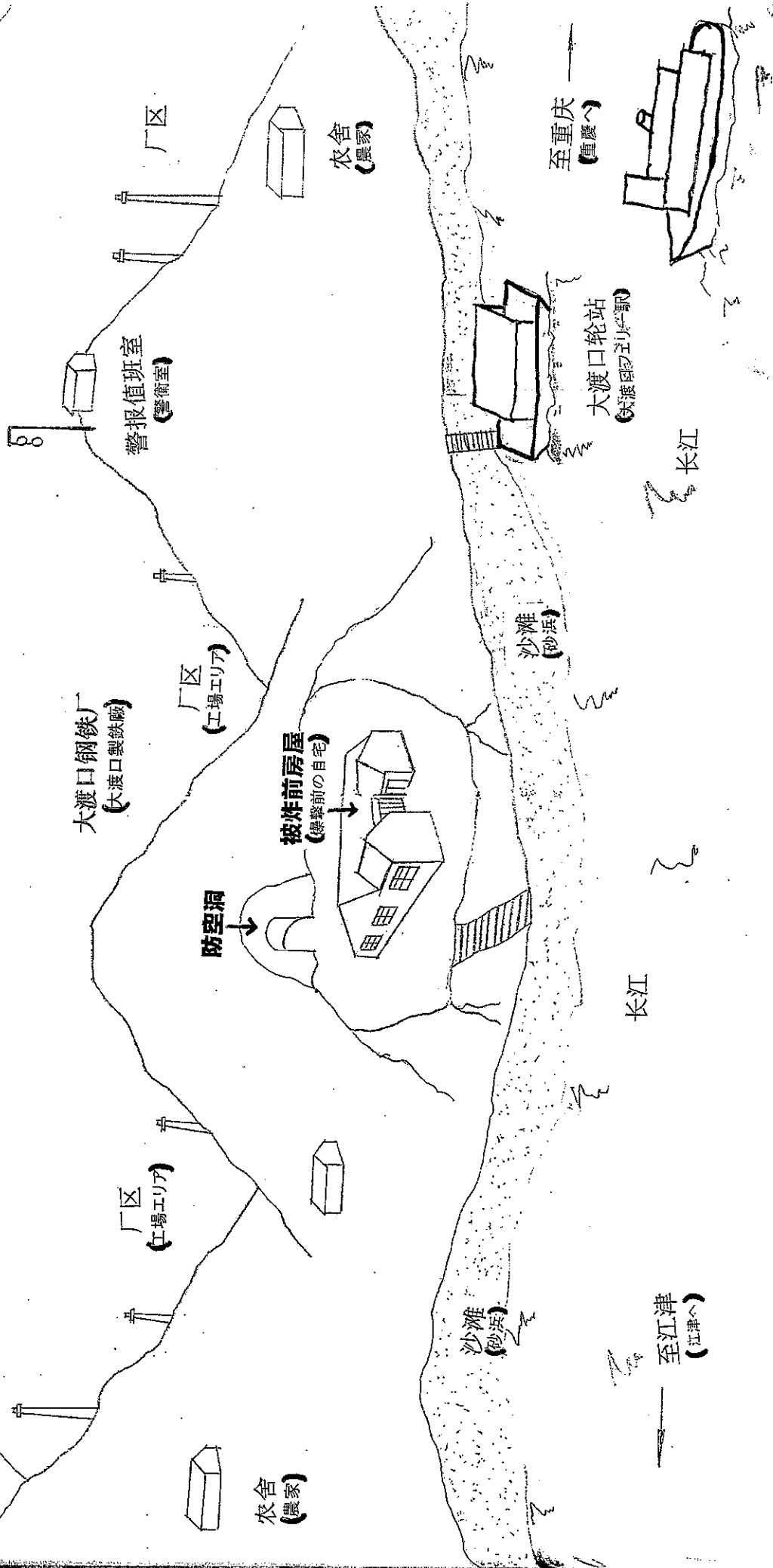
私は、日本の裁判官の皆さんが、以上に述べた私の体験事実を真摯に受けとめて理解され、私が本裁判で求めている謝罪と賠償を認めるように心から訴えます。

以上



被炸前徐长福住房所在地示意图
(被炸前徐长福住宅所在地概略図)

原本のとおりに

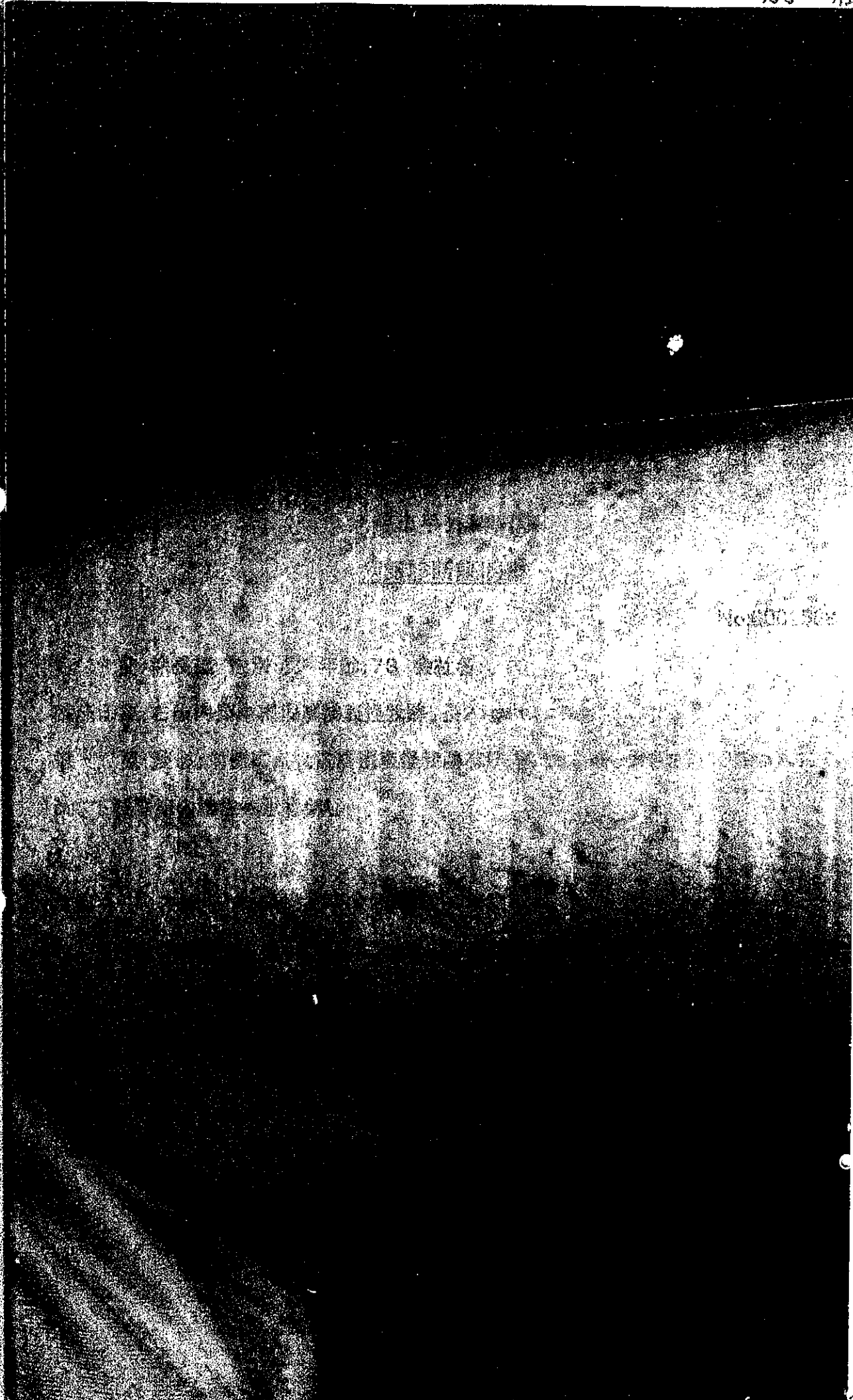




C

C





123

无锡市翻译协会 翻译专用章
Wuxi Association of Translators
我们保证译稿 * 100% 交给您查收
+86 91 8281 1111 +86 91 8281 1112